# 「埋蔵文化財発掘調査①」

**はじめに**

今月は、市教育委員会が近年民間地で行った、埋蔵文化財発掘調査について、その保存方法の一例を過年度の調査成果を例に紹介します。なお、埋蔵文化財とは、土に埋もれた文化財のことで、住居の跡や貝塚など人が生活した痕跡を遺構と呼び、土器や石器など人が使用した道具を遺物と呼びます。そして、これらがある場所ないしは地域が遺跡です。

**発掘調査の流れ**　建物を建てる場合、その場所が遺跡の範囲内であっても、実際に掘ってみなければ埋蔵文化財があるかは分かりません。そのため、試掘調査と呼ばれる試し掘りを行うことで、最終的に埋蔵文化財の有無を判断します。試掘調査で埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財を破壊せずに工事が行えるか協議しますが、工事の計画上、埋蔵文化財が破壊される場合、緊急発掘調査を行い、壊される埋蔵文化財の記録をとります。調査終了後、記録した各資料を整理して報告書を発行します。

**嘉数内城原第二遺跡**

この遺跡は、平成16年の試掘調査で確認されました。平成19年に行った個人住宅建設に伴う緊急発掘調査では、600を超える遺構が検出されました。これらの遺構の多くは列状に並んだ小穴で、グスク時代に掘棒を使用して畑作を行った痕跡と考えられています。

平成24年、この遺跡の範囲内で2件の個人住宅建設が計画されました。そのため、試掘調査を行った結果、地表下約2メートルから、小穴が列を成す状況で確認されました。一方、建設予定の住宅は、2件とも工事による掘削深度が遺構の検出面に及ばず、埋蔵文化財が壊されないことが分かりました。そのため、緊急発掘調査をせずに住宅の着工となりました。

埋蔵文化財は、発掘調査を行うことでも破壊につながります。そのため、なるべく現地に残すことが最善の保存方法と言えます。

**問合せ：文化課 ☎893-4430**

平成19年に確認された600以上の遺構（嘉数内城原第２遺跡）

# 茶ぐぁーゆんたく 139

## 「花といえば嘉数」冬の風物詩　イルミネーション

1970年代半ば頃から90年代にかけて10月中旬から年明けの2月頃まで、国道330号線沿いの嘉数の夜は、白熱電球が規則正しく輝く美しい光で彩られていました。冬のこの時期は、夜道を歩くと光の海に目を奪われたものです。これは「電照菊」です。夜間、光を当てて菊の日照時間を伸ばし、花芽が付くのを遅らせて、出荷時期を調整するための電照です。

沖縄戦後、嘉数の人々は、地元に戻ると農業に励み、花作りが始まりました。キンギョソウやグラジオラス等、様々な花を育て、女性が近くの米軍部隊（嘉数ハイツや大謝名）へ行き「チェンジ」と言って、花をたばこや缶詰などと交換しました。そのうち、バスを使って嘉手納や那覇の天久にあった部隊までも行きました。花束はタライに入れ、頭に載せて運びました。その後、女性が運転免許を取り、軍のパス（通行許可証）を持って車で基地に出入りし、現金で売りました。人々の生活が安定してくると、県内の市場で花が売れるようになり、次第に基地には行かなくなったそうです。

▲菊の電照栽培（嘉数）1982（昭和57）年

1972（昭和47）年の本土復帰後、嘉数の花作りは大きく転換しました。本土移出が自由になり、品薄になる冬春季の菊が脚光を浴びました。嘉数でも高く売れるという事で、次々に電照菊作りが拡大していきました。規格に合う菊を育てるには手間がかかり、忙しい時期にはアルバイトを雇って仕事をこなしました。また、菊だけで手いっぱいとなり、他の花は作らなくなりました。統計によると、最盛期は1981年で、嘉数の切花類の栽培面積は834アールにのぼりました。現在は高齢化により、嘉数の菊生産者は数名となり、あの「光の海」は見られなくなりました。

嘉数高台公園が平和学習や市民の憩いの場として利用され、住宅地として発展している嘉数ですが、戦後の焼け野原からたくましく復興し、「花といえば嘉数ということだった。」（市史8巻の証言より）時代があったのです。

『宜野湾市史』への問合せ
市立博物館 ☎870-9317